

福祉系対人援助職養成の現場から

62

西川 友理

「かんがえるをあそぶじかん！」
について

私は昨年から、「かんがえるをあそぶじかん！」というイベントを不定期に開催しています。これはこどもも大人も参加できる哲学対話の場所です。

哲学対話というのは、普段の生活の中から生まれた疑問について、皆で対話をしながら考える場です。人の話をよく聞いて、自分の考えを確かめて、自分の意見を言う、という場です。哲学の知識は要りません。自分の生活の中で生まれてきた言葉で考えます。答えを出す必要はなく、正解があるわけでもなく、対話をするといいつつ、決して話をしなければならぬわけではなく、聞いているだけでもよいとする場です。多様な考えや価

値観に触れ、自分の考えに気付く場になります。

哲学対話は、アメリカの哲学者であるマシュー・リップマンが1970年代に始めた教育運動が始まりとされており、日本国内でも今様々な場所で開催されています。

数年間、いろんな場所に参加しましたが、上記のようなルールがある以外は、これといって決まったルールがあるわけではなく、場所によって進行のあり方が少しずつ違います。

私がおやこ哲学対話を実施する時には「喋っている人のお話を聞いてみる」「聞いているだけでもいい」「いつ出て行ってもいい、いつ戻ってきてもいい」等、場の安心を保つためのルールを3つほど提示します。それ以外は、どのように過

ごしていただいても OK, としており、大人も子どもも出来るだけ自分の居たい姿で居てもらいたいと思いながら実施しています。

ある日のおやこ哲学対話にて

「けんか」をテーマに哲学対話をした時のこと。会場には2、3才の子どもから、小学生、そしてその保護者の皆さん、大学生の参加者や、スタッフなど、総勢20名程の人がいました。

私は哲学対話を行う際、テーマについて、皆に問いを考えてもらうことが多いです。皆で沢山の問いを出した後に、どの問いについて考えるかを皆で話し合います。このプロセスにちょっと時間がかかるのですが、皆がメンバーの多様性を少しずつ知っていく、多様性に触れて心や頭が刺激される、とても面白い時間です。

この日はたくさん出た問いの中から「けんかって何をする事？」という問いについて皆で考えました。

「ボクシングとかのスポーツと何が違う？」「必ずしも蹴る殴るがあるわけじゃないよね？」…という問いから始まり、

「どんな理由でもケンカってしんどいって思うのはなんでだろう？」「え、私ケンカが出来るって素敵だと思うよ、しんどいってのはなにがしんどいと思うの？」…

皆がヒートアップして、様々に話が広

がります。

ふと、5歳の女の子 A ちゃんと目があいました。

「Aちゃんは、お友達とけんかしますか？」と聞くと、Aちゃんはパッと顔を輝かせ、「けんか、大好き！なぐりあいとか面白い！」

と言いました。あまりに嬉しそうでこちらも楽しくなってしまう、

「ほう！じゃあお友達とかもなぐるの？」と畳みかけると、Aちゃんは、「うんッ！」

と胸を張って頷きます。

「じゃあ…お母さんは？」

「お母さん、めっちゃなぐる！ボコボコになぐる！」

と言ってゲラゲラ笑っています。

「へえ、そうか！じゃあ園長先生は？」と聞くと、Aちゃんはぴたっと止まりました。

そして、真面目な顔で、

「…なぐらへん（殴らない）。」と言いました。

「あれ、そうなんや。じゃあ…担任の先生は？」と聞くと、

「…なぐらへん。担任の先生とか、園長先生はなぐらへん。」

「へええ、なんでなんやろ、何が違うの？」と聞くと黙り込む A ちゃん。

そして1分ぐらいたって、ゆっくりと言いました。

「あのね、なぐり“あい”ができる相手

は、なぐれる。」

その場に居た子どもも大人も、それを聞いて

「……なるほど！」

と唸りました。

「じゃあ赤ちゃんとかは、なぐらへんのかあ…」

とつぶやくと、真面目な顔でうなずく A ちゃん。彼女の中の「対等」という概念の萌芽を見せていただいたような瞬間でした。

自分のおなかの中の声を把握する

「かんがえるをあそぶじかん」では、こんな宝物のような場面が、ゴロゴロころがっています。

議論に夢中になる子どもがいる一方、年齢の小さい子ども達はさすがに集中力が続かず、対話の輪から外れて遊びます（保育スタッフが遊び相手をします）。聞いていないようできて、ずっと外に行かずにお部屋にいて、耳だけこちらに向けている子どももいます。大人も同じように、ずっと聞いている人もいれば、何度も発言する人、ずっと黙っていて、おもむろに 1 度だけ話す人もいます。大学生は自分の身の置き所がよくわからないままに、やがて自分の振舞い方を気にしなくなっていき、いつのまにか話の中に入っていきます。

「大人の人に聞きたいんだけどさあ！」と大人に問いただす子どもも、

「子どもの人に教えてほしいんだけどさあ！」

と子どもに尋ねる大人もいます。

約 2 時間があっという間に過ぎます。

何度も参加してくださっている方から、「この場を重ねていくと、上手に言おうとか、うまくまとめようという気負いがなくなっていく」という感想をいただきました。何よりうれしい言葉です。「ただ自分であること、自分のお腹から生まれる言葉を、大事にすること」の経験が、自分の想いや感情を無視しないエクササイズになると考えます。

というのも、この日本社会で暮らしていると、自分の想いや考えよりも、周りの人の想いや自分の役割からくる“～せねばならない”“～すべきである”を優先させることがどうしても多くなってしまおうと思うためです。それによって、自分の想いや感情を口に出すことが難しくなるだけでなく、「あれ、私本当は何が好きなのかな」「どうしたいと思っているのかな」と人によってはそもそもの自分の想いや感情をきちんと把握すること自体が難しくなってしまう人もいるように感じています。そんな人は大人でも子どもでもいるのですが、特に大人には重症患者がいます。

“～すべき”“～せねば”を優先させる、カッコつけちゃう自分もすてき、だけど、カッコつけない自分も愛しい、と感じられる場だといいなと思いつつ、会を実施しています。

ある日の

「かんがえるをあそぶじかん！」

「え?! 今日の『かんがえるをあそぶ』、学生は私だけしかおらへんの? 私、勉強が嫌いやしテストの点数もいつも低いし、『かんがえる』なんて一番出来へんことやで?! それに子どもとのかかわりもほとんどしたことないし……ムリムリムリ!」

大学生になって約半年、保育を学ぶ学生 B さんです。

3 人で対応予定であった保育学生ボランティアが、諸々の事情で 2 名欠席になってしまい、よりによって一番「自信がないなあ、子どもの相手も上手く出来ないなあ」とブツブツ言っていた B さんだけの参加となってしまいました。

それまでの授業や授業内容で哲学対話がどんなものか、イマイチ把握できていなかった彼女は頭を抱えています。哲学対話の実践経験はなく、今回が初めて。

「難しく考えずに、ただ同じように参加をして、子どもが対話に飽きてきた様子を見たら、一緒に遊びに行ってくれたらいいんだよ。」

「え、そんなの、子どもが飽きてるかどうかなんて、どうやって判断するの、そんなんわからへん、ムリムリムリ……!」

と言ってもその時間は来てしまい、申込者である親子が来れば、関わりを始めざるを得ません。少々硬い表情で

「こんにちは……!」

と挨拶する B さん。幸い今日の参加者は

数組で、何とか対応できそうな人数です。

今日のテーマは「家族」。問いは「家族ってどういうひとのこと?」に決まりました。

「血が繋がっているひとのこと?」「でもおとうさんとおかあさんは血が繋がってないよ?」「一緒に住んでいるペットは家族?」「一緒に住んでいない、施設に入っているおばあちゃんは家族?」…

対話を進める中で、年齢が小さな子どもがなんとなく飽きてきて、お母さんにまとわりつきながら、

「お外、行きたい」

と、声に出してくれました。

その声を聞いた B さんは、こちらをちらっと見ます。私がうなずいたのを見て、子どもに「いっしょに行こうか」と声をかけ、子どもと共に外に遊びに出してくれました。

場に年齢が高い人たちばかりになった瞬間に、スッと一段深い話になります。B さんのおかげでお母さんたちが対話の場に居たままでいることができます。

暑い盛りの外遊びです。B さんは 15 分位で子ども達を連れて水分補給に戻ってきてくれました。またしばらく、子ども達はお部屋の中で過ごします。対話に関わったり関わらなかったり、思い思いの姿で過ごします。そしてまたもや「お外に行く」とのこと。

B さんは次はもうこちらに目配せをせず「ほないこか」と自分で声をかけて、子どもについていきました。

しばらくして、一番小さい子どもを抱っこして戻ってきた B さん。

「あの、ちょっとコケてしまって、泣いちゃったんです……」

とのこと。ざっと見たところ、キズもなく、頭を打ったわけでもないようです。

「すみません……」

とこどもの保護者に謝罪する B さん。

「大丈夫よ、よくあることよ」

と言ってくれる保護者の方。

やがて終了時間がきました。

終了後の片づけをしながら、B さんにどうだった？と聞きました。

「なんか、2 時間あっという間やった。」
とのこと。

「〇オの子ってあんなに色々考えて、ちゃんと言葉で言えるんやなって思って…」

「こっちで〇君はこんな遊びをするし、〇ちゃんはこうしてたし…」

と、子どもとのかかわりの話、さらには「親戚ってどこまで家族なのかな…私はこう思うんだけど…」

「うちの家族はさ…」

と、対話の内容についても話します。

もともとお喋りな B さんですが、それにしてもずっと話しています。片付けが終わり、帰路につき、帰り道が分かれる瞬間まで、ずっと話していました。

参加者はもちろん、スタッフにも、巨大なお土産が頭の中に発生するのが哲学対話です。

B さんは子どもと関われるか不安だったようですが、遊び相手をし、コケた子どもを抱きかかえ、対話にも参加し、そしていろいろと考えながら、この数時間を過ごすことが出来ました。

「専門職としてどうするか」と 「私自身としてどうあるか」

目を閉じていて周りが見えない時、手を伸ばして、誰かや何かに触れることで、自分の手のありかを実感的に理解する。対話とは、そのような場面に似ていると思います。同じような手に出会って安心したり、よい触り心地や悪い触り心地を感じてみたり、相手に合わせて自分の手の形や触り方を変えてみたり……時には何かに触れて初めて、自分の手が思わぬ形や温度になっていることに気付いて驚くこともあります。

保育士や社会福祉士等、福祉系対人援助職を目指す学生は、授業では「相手に何をしてあげるか」「何をどのように提供するか」つまり、「専門職としてどうするか」ということを中心に学びます。

しかし、それと同じくらい「私自身としてどうあるか」を知る機会が必要だと思うのです。

「自分自身としてどうあるか」には正解がありません。いわゆる倫理綱領とか職業倫理といった、専門職としてのあり方は「学ぶ」し、その姿勢と態度でサービスを「提供する」と思うのですが、「自

分自身としてどうあるのか」は、その人が今まで過ごしてきた人生と、人との付き合い方と、個性が直接反映されるものです。教科書に書いているわけではないし、教員がこれこれこうしなさいと指導する類のものでもありません。

しかし、「私自身としてどうあるか」は、「専門職としてどうするか」と同じ位、時にはそれ以上に支援のあり方に強い影響を及ぼします。

だったら、どう伝えるか。

保育士のタマゴと、おやこ哲学対話

新しい誰やか何かに出会って、自分の形を確かめる。私自身として、どうある

かを知る。しかもそれを、親子と関わる中で知ることが出来る。保育士を目指す学生にとって、おやこ哲学対話は「私自身としてどうあるか」を経験できる貴重な場所だと思うのです。実際にBさんのように、気づきを得る若者が沢山います。

今年に入って始めたばかりの「おやこ哲学対話×保育学生」の場。だいたい1～2か月に1度のペースで実施しています。今のところ、なかなか面白い化学反応が次々と起こっています。

これからどのように発展し、参加者と学生たちがそれぞれお互いにどんな影響を与え合っていくのか、わくわくしながら一緒に場を作っていきたいと思っています。